

2009年度〈三省祭り〉「アニミズム」という銀河へ



進歩する時間と別に、回帰する時間に耳を傾けた詩人・山尾三省さんが没して9年。文明が迷路に差し掛かった今、ますます三つの遺言が現実味を帯びてきた。三省さんに於けるアニミズムとは何だったのかを探り、未来へのビジョンを語りたい。10月31日〈三省祭り〉で、司会の三島さんは問いかける。北は北海道から南は沖縄まで全国各地から参加された方々で、神田明神は熱気に溢れた。

出演者: 立松 和平氏(作家) 高良 勉氏(詩人) 長屋 のり子氏(詩人) 鎌田 東二氏(京都大学教授) 司会: 三島 悟

「三省さんは思想を体現化する人だった。詩は自然界との通路のようなもの。それを詩にする事により、私たちに自然への通路を見せてくれる。木と語らい、鳥と語らい積み上げてきたものであるが、一つの法の中に入っていったのだと思う。……そういう人に私になりたい」と、三省さんを讃えられた立松さんは「全ての世界は、私たちが暮らしているこの場所の中にある」と言われる。

高良さんは「沖縄には神社や氏子制度はない。祖先崇拜と自然崇拜であり、かみぐとう(神事)は暮らしと一体となっている。壊れるものをアニミズムが防いでいる」と琉球弧からの発言をされた。部族の話や三省さんとのエピソード、ナナオ氏から貰った木星の話、詩人の感受性の豊かに心が踊る。

裸足のお兄ちゃん。幸せになるおまじない。“山だったじゃい”“山だったじゃい”と兄妹の掛け合いで歌った賢治の詩「種が原」などのエピソードを披露された長屋さん。その傍らで、三省さんは喜んでおられるようだった。そして、死にゆく兄が、妹のために一心に火を焚く憫みの詩「五右衛門風呂」の朗読に胸うたれた。

「小さくある事の大切さを教えてくれた」と語る鎌田氏は、〈三省祭り〉開催にあたり……「詩人というのは、世界への、あるいは世界そのものの希望(ビジョン)を見出すことを宿命とする人間の別名である」と、三省さんは言う。そんな「詩人」の言葉と魂を、わたしたちはいつも思い出して



2009年12月18日、東京自由大学設立10周年を期した一連の催しの一環として、特別企画〈閑談〉「ほどきとむすびの宇宙」が開催され、会場となった日本橋公会堂(東京都中央区)には、300人を超える参加者が集った。今回が初顔合わせとなった佐治晴夫氏(鈴鹿短期大学学長・宇宙物理学者)と玄侑宗久氏(作家・福聚寺住職)、そして、司会役も務めた鎌田東二東京自由大学理事長の三氏が登壇した。

日本人に根づいた「ほどきとむすび」の世界観

佐治氏のピアノの演奏で舞台は静かに幕を開いた。かつて氏の提案で(ボイジャー)に搭載されたバッハ作曲「プレリュード」の美しい旋律が会場を包み、まず玄侑氏、佐治氏それぞれの視点から、「ほどきとむすび」の世界観が語られた。

漢字を訓読みにほどき、異文化を上手に取り込んだ日本語の特性や、神道の基盤に矛盾なく仏教を取り入れた宗教観にみるように、日本人の精神性には「ほどきとむすび」が古くから根づいていたと玄侑氏。しかし、マニュアルにあふれ、むすびすぎて自己言及の病に陥っている現代人は、状況の中でむすんだりひらいたりしながら、心の宇宙を統合する八百万の人間観を取り戻してほしいと説く。

佐治氏は、137億年という歳月を経て進化を遂げた宇宙の歴史を、数学や物理学のことばで縁取りされた壮大な“宇宙神話”として語った。ここにも、宇宙の中で星々が生と死を繰り返す「むすびとひらき」の悠久の時間があり、その星の中で合成された物質が私たちのからだをつくっていることにも気づかされる。両氏の共通の関心として、童謡の「むすんでひらいて」が挙がった。この歌は、あのジャン・ジャック・ルソーの作曲で、日本語の作詞者は不明だという。もともとは賛美歌だったそうだが、日本で子どもたちに親しまれるようになったあの歌詞には、この国の国柄や現代宇宙論にも通じる奥深い意味が読み取れるようだ。

「しあわせ」感の変遷と日本神話にみる女性性

続いて、鎌田氏は10歳で初めて『古事記』を読んだ感動について、「イザナギが右の目を洗うとツクヨミノミコトが生まれ、鼻を洗うとスサノオノミコトが生まれた……」という一節にふれたとき、至福に包まれたと語った。玄侑氏も、「文学界」に発表した短編「スクナヒコナ」に言及し、日本神話に寄せる関心を示した。スクナヒコナは波間より来訪し、オホクニヌシの国造りに協力して、ふたたび去っていく小さな神。その協力関係は、「行為を合わせる」ことにほかならない。かつて日本人は「幸せ」を「為合わせ」と書き、それは

立松和平さんを心より追悼します

鎌田 東二 (NPO法人東京自由大学理事長・京都大学こころの未来研究センター教授)

立松和平さんが亡くなった。突然の訃報に、多くの人が「まさか!」という思いを持った。わたしもその一人だ。

昨年の10月31日、東京自由大学の「三省祭り」であんなにお元気な姿を見ていたから、当然だ。驚いた、というよりも、まさか、であった。訃報ではなく、誤報ではないか、と一瞬疑ったほどだ。だが、それは事実だった。

立松さんは1947年に栃木県宇都宮市に生まれた。地元の高校を卒業して、1966年に早稲田大学政経学部に入学した。学生運動が盛り上がった頃だった。フーテン、アングラなどが流行していた。

1970年、デビュー作の「途方にくれて」を『早稲田文学』に投稿、掲載された。そして、「自転車」で、早稲田文学新人賞を受賞した。その頃、わたしはリアルタイムで『早稲田文学』を読んでいた。中上健次が同誌に発表した「灰色のコカコーラ」もリアルタイムで読んだ。そんな中に、立松和平さんの小説もあった。

小説は地味で、華やかなところがなかった。中上健次のような激しさもなかったような記憶がある。だが、地道ながら、しっとり、じっくりと伝わってくる情調があった。

しばらくして、宇都宮に戻り、市役所の役人になったという話を聞いて

2009年度ゼミナール報告

調査研究事業

玉城仏道ゼミ「維摩経読誦」

野村 懐忍 (高野山東京別院執事)

すべての生き物は仏の遺伝子を持っています。変な言い方ですが仏ウイルスを保護しているのです。発症すれば発善提心です。仏の遺伝子が発動、発得すれば仏教は「これでおしまい」です。

いかにして娑婆世界で凡夫が仏の遺伝子を活性化するか? いたすらごのような愚直な実践が続ける以外にありません。娑婆世界には聖なる実践などありません。娑婆世界は素晴らしい世界です。些細な実践の継続が聖なる結果を生みます。「不放逸に努力せよ」という釈尊の最期の言葉は娑婆ならではの重大な意味を持っています。

維摩経は超越的な悟りの世界を説く一方で娑婆世界の凡夫の立場を忘れません。維摩経の愚直な読誦を通して甚深なる仏の世界を参究していきたいと思います。

昨年、参加者のひとりが玉城先生よりいただいた書簡を公開してくれました。その中に「如来さまのひとり働き」という言葉がありました。玉城先生の畢生の一句のように感じました。

エーヒ ピッカウェー!! 来たれ、比丘よ!!来たれ、善男子、善女人よ!!
玉城先生の導きの下、如来自受用三昧の甚深なる秘密莊嚴蔵に参入し窮尽せよ!!
こころざしある方の参加をお待ちしております。 目標!「仏狂徒!」 野村 懐忍

自主ゼミ

担当:鳥飼 美和子 (担当・理事・副運営委員長)

【民俗舞踊の身体研究会】

民俗舞踊の身体研究会も講師の須藤武子氏のご厚意と参加者の熱意とで、5年目を迎える。2009年度は引き続き、新潟県柏崎市の女谷に伝承する「綾子舞」を通して民俗舞踊における身体感覚を体感していた。須藤武子講師の身体と言葉にいざなわれ、少しずつ身体の使い方が変わり、踊りが変わっていき醍醐味を味わいつつある。また、若手県早池峰山周辺に伝承する早池峰大僧神楽の春の舞を見学する旅を計画し、それに向けて、須藤先生とともに指導していただいている、日本民俗舞踊研究会の増田了位氏の神楽歌を聴き、ともに歌い、準備を進めている。

【シュタイナーゼミ】

シュタイナーゼミは2001年から続いている自主ゼミである。ここ2年ほどシュタイナーの著作の中でも最重要な一冊ともいえる「神秘学概論」を読み進めてきた。人間の神秘学的構造から生死の問題、宇宙論まで壮大な世界観であった。シュタイナーの中核に迫る著書を読了することができたのはどんな質問にも答えにくださる西川隆範講師のナビゲートのおかげであった。コアな内容であったせいか参加者が限られてきているが、新年度は、少し趣を変えて、仏教についてのシュタイナーの著作を紐解くことになっている。仏教について新たな視点が開かれることを期待している。

事務局だより

酒井 孝 (理事・運営委員・事務局長)

私ども主催の各種講座等の受講料が安いのは、当代随一のレベルの講師陣が、薄謝にもかかわらず、来てくださっているからです。さらに、その運営は、手作り・手弁当だからです。この講座の担当やニュースレターの発送を手伝ってくださるボランティアを募集しています。身近に、講師の先生方のすごさに触れられたり、一見内職的な作業の中にも、ちょっぴりアカデミックさを発見できたり……、和気あいあいの共同作業の輪に加わりませんか。

●http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/

●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.14

2010年(平成22年)3月25日発行

編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870

デザイン (有)アンビエンス / 印刷 (株)ベクトル

自主ゼミ

2009年度「いのち」を考えるゼミ

井上 喜行 (担当・監事・運営委員)

1

9.15(火)

2

10.20(火)

3

11.17(火)

4

12.15(火)

5

1.19(火)

6

2.16(火)

生きるとは何か〜死に直面した体験を通して〜
加藤 一郎 (東京自由大学会員)

普通学級の中で障がい児と共に過ごした輝ける日々を追って
渡辺美英子 (東京自由大学会員)

「行」を通して「いのち」を考える
戸田 日展 (遺書院住職)

「私の祖父の息子」とわたし
殿谷みな子 (作家)

「いのち」と墨彩画
西松 凌波 (画家)

「進化の法則」と「法則の法則」
一条 真也 (北陸大学客員教授)、海野和二郎 (東京自由大学学長)

それぞれ東京自由大学の会員、関係者が講師となって開催しました。

主催ゼミ

「現代人のためのやさしく役に立つ『唯識学』入門〜ティク・ナット・ハン作『唯表五十頌』を味わう〜」から学ぶ

立花 蓉子 (一般)

藤田一照講師を迎えての「唯表五十頌」の講義が今回終了了了。「学にしっかりと裏打ちされた行」と「行を正しく導く学」のどちらも必要だと考える「行学一如」の立場から、大乘仏教の基礎教学である「唯識」を、その深さを失うことなく、現代人にとってやさしくかつ役立つように伝えたいと仰る講師の思いが、毎回伝わって来る夕べであった。

一連の講義で扱われていたテーマは、人間の存在の真相・認識構造であり、そこで問われていたのは私達自身のことであった。私達がどのような枠組み・視野の中で生きているのか? 「唯識」の八識モデルに基づいて、その枠組みを示すことにより、幾重もの枠組みの中でがんじがらめになっている自己の実態を自覚させてくれるプロセスであった。そして、その自己認識の深化こそが、人間が深いレベルで握りどころとしている存在の根拠の質的变化に通じ、凡夫が仏になる道が開かれると説く「唯識」のメッセージは、極めて実践的である。

藤田講師によれば、「唯識」では、識(表象)の外部に境(客観的な対象)というものはない。あるのはただ識(表象)のみである。これを「唯識無境」と言う。この考えによれば、私達が認識している世界は、心の中の概念が作りだしているだけである。そのようにして仮構した世界を、実在していると思い込むから、執着が生じ、自らが作った虚構の現実拘束され、苦悩が生じるのである。このことに本当に気づくには、理屈でなく、瞑想や坐禅のような行の実践によって体得する他はない。修行によって「苦」を「楽」のサイクルに方向転換する事である。そういう実践のための道しるべ・地図として唯識学を生かしていくべきなのだ。

この度、藤田講師が曹洞宗国際センター所長に就任されることになり、第十二回までで「唯識」の月例講義は終了するが、新企画のシンポジウムにおいても、パネリストとしてご参加が予定されている。引き続きのご縁を願うと共に、ご多忙な中での1年間のご出講に心から感謝の意を表したい。

■編集後記

山口 卓宏 (運営委員)

「しかし、鎌田先生も変な人だね。でも、いつか会うと思っていたよ」という立松和平さんの栃木訛りの言葉が、とても印象深く記憶に残っています。「三省祭り」の後の帰り道、駅までの道案内をしながらのことでした。「ご縁」という言葉は、仏教の核心の一つを表した言葉ですが、今年度の東京自由大学の活動もまさに、「赤い糸」の縁取りのようでした。ある年(は)川であり、またある年はほうきになる。同じその糸が、万華鏡の模様のように形を変え、人と人・人と場所のつながりをくっきり浮かび上がらせる。さて、来年度はどんな形が見えるのでしょうか。

21世紀世界地図総括～「目線」を変える～

今年度の5人の先生に共通している点は、私たちがふだん慣れ親しんでいる自分の「目線」を変えることの重要性を強調していることだと思います。現代の様々な閉塞状況を打開するための、確かな手ごたえと示唆をたくさん頂きました。

4/18(土)「21世紀の新しい環境観」

■星川 淳氏 (グリーン・ピース・ジャパン事務局長)

『自己を減却するのではなく、狭い自己をもっと拡げて考えてみる。つまり自然も自分だと思えるようになればよい』『立法権・司法権・行政権の三権を監視する第4権(メディア・NGO等)の必要性』内側を見る学び(瞑想等)だけでは、何も変えられない。外側に向かって具体的な行動をすることも大切であり、その二つは車の両輪のようなものである。自己を減却するのではなく、自己を拡大することが、今必要なのではないか。

6/6(土)「トランスパーソナル心理学からみた現代人の成長とスピリチュアリティ」

■諸富 祥彦氏 (明治大学教授・トランスパーソナル学会会長)

人間の心の成長の到達点は、「絶対幸福」にある。ではそれはどのような状態なのか。『すべての幸福を、私の幸福と感じられる状態』『私という意識からの解放』『宇宙との一体感』世の中には悪質なスピリチュアル情報・商品があふれている。だますほうの問題が大きいのは当然だが、だまされる方にも問題がある。現代人が人間として向上心をもって生きていくためには、教祖的な人間・発言にただただ依存するのではなく、本人が自分の人生をかけて、心の底から納得し、心の深いところで『自己決定』し、『自己選択』することが必要である。

9/19(土)「三千大千世界と宇宙」

■観山 正見氏 (国立天文台台長)

仏教では、一世界を1000個集めた世界を「小千世界」、「小千世界」を1000個集めた世界を「中千世界」、そして、この「中千世界」を1000個集めた世界を「大千世界」という。仏教は2500年前に、すでにこの宇宙の階層性を明らかにしてきた。そして、実際の宇宙空間には特別の場所がなく一様(平等)であること、また、宇宙は見えない力、見えない物質(ダークマター・ダークエネルギー)で満たされていることも仏教の内容と類似している。

ボディワーク 身体探求の二大巨峰「ふたりの野口」報告

鳥飼 美和子 (担当・理事・副運営委員長)

近現代の日本において身体のことを語るときに、「ふたりの野口」を避けて通ることはできない。偶然同じ名字である野口晴哉と野口三千三。天才的であり、かつ並はずれた探求者であったふたりについて、講師のおふたりに語っていただき、野口整体と野口体操の入り口を体験するミニワークを指導していただいた。

5/17「野口整体—その思想と実践」

講師・熊坂 達彌氏
(心体調整室「有備会」主宰)

まず円陣になって手をつなぎ呼吸を通す野口整体流の自己紹介からスタート。野口晴哉の五分間自叙伝を資料に、その生い立ちから彼の人生を紐解いていった。 幼少期の病氣によって培われた人間観察眼、12歳の関東大震災のときに評判になった人を治療する力。霊術家・松本道別との関わり。松本道別が人体放射能と呼んだものが、野口晴哉にとっては愉気となり、催眠術は潜在能力教育として確立された。それは特権的なものではなく、もともと人間が持っている能力であるとし、それを掘り出すこととして整体を編み出していった。熊坂氏は野口整体の神髄は「病は治すものではなく、治るものである」ということであると語った。それを実践していくのが講師の熊坂氏の仕事でもある。後半は野口整体の体験ワークとして、二人ひと組で背骨に手をかざして愉気をして、手の動きによって身体がどのような反応を示すか観察し合

「ふたりの野口」に共通するのは、身体にやどる「自然」の発見であり、その主張は、現代にこそ必要とされる、「いのちの全体性」の回復である。

スピリチュアルデザイン—コンテキストデザインワークショップ総括

上林 壮一郎 (デザイナー、運営委員、担当講師)

霊学的世界というコンテキストを遠く近くに意識し、無意識世界と現象世界を結ぶ方法を探る本ワークショップの2009年度のテーマは、「言語」。デザインと言語はあまり関係ないように感じるが、深いところでは本質的な問題である。そんな予感が、実際のワークショップを経て確信へと変わった革新的で核心的な一年であった。

「境界が曖昧なロボット」—動的な関係性の中に出現するロボット 7月5日(日)

昨年度のスキマロボットに引き続き、慶應義塾大学の大澤博隆先生をゲストに迎えて、置かれるものによって空間にキャラクターが出現するというロボットの実験を行った。自由大学で最もエレクトロニックなワークショップである。

「書体ともの」—古書体漢字のセンス 8月9日(日)

中国の書家の仲崇霖先生をお迎えし、象形文字からより抽象的な漢字へ変化する途上にあった古代の書体、篆書の造形精神で実際の道具のスタイリングデザインをし、発泡スチロールで立体化し、古代における機能と形の結びつきのセンスを探った。ニクロム線カッターが大活躍した。

11/21(土)「軒下には豚、旅先では屠畜。—肉の来し方を取材して」

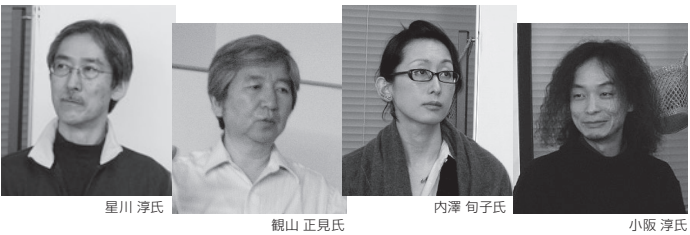
■内澤 旬子氏 (イラストルボライター)

世界の10カ国以上の国で、家畜(豚・牛・鶏・羊)を屠殺する場面を自分の目で見てきた。今の日本ではそれを直接見ることは、ほとんどない。でも実際は、東京芝浦の施設で、毎日豚約1000頭が食肉として解体されている。毎日のように食する肉と、生体としての豚が結びつかないことにとても違和感を感じる。そこで実際に自分で豚を3匹飼育し、その後自分で食してみた。悲しみはほとんど感じなかった。「食べるというよりは命をとりこんだ」という感じだった。

1/16(土)「宇宙の描き方」

■小阪 淳氏 (グラフィックデザイナー、美術家)

地球から宇宙をながめると、そこに見えるのは昔の宇宙の姿である。私たちに見える宇宙の中で一番遠くから来た光は、137億年をかけて137億光年の距離を旅してきた。しかしその長い旅間にも宇宙空間は膨張し続けたため、光が進んでこなければならぬ道のりは、スタート時点よりもどんどん伸び、光が放たれた場所自体も、はるかに遠ざかってしまっている。光が届いた現在、その場所は、もう私たちから470億光年のかなたに離れていると推測される。



ボディワーク 身体探求の二大巨峰「ふたりの野口」報告

鳥飼 美和子 (担当・理事・副運営委員長)

近現代の日本において身体のことを語るときに、「ふたりの野口」を避けて通ることはできない。偶然同じ名字である野口晴哉と野口三千三。天才的であり、かつ並はずれた探求者であったふたりについて、講師のおふたりに語っていただき、野口整体と野口体操の入り口を体験するミニワークを指導していただいた。

5/17「野口整体—その思想と実践」

講師・熊坂 達彌氏
(心体調整室「有備会」主宰)

まず円陣になって手をつなぎ呼吸を通す野口整体流の自己紹介からスタート。野口晴哉の五分間自叙伝を資料に、その生い立ちから彼の人生を紐解いていった。 幼少期の病氣によって培われた人間観察眼、12歳の関東大震災のときに評判になった人を治療する力。霊術家・松本道別との関わり。松本道別が人体放射能と呼んだものが、野口晴哉にとっては愉気となり、催眠術は潜在能力教育として確立された。それは特権的なものではなく、もともと人間が持っている能力であるとし、それを掘り出すこととして整体を編み出していった。熊坂氏は野口整体の神髄は「病は治すものではなく、治るものである」ということであると語った。それを実践していくのが講師の熊坂氏の仕事でもある。後半は野口整体の体験ワークとして、二人ひと組で背骨に手をかざして愉気をして、手の動きによって身体がどのような反応を示すか観察し合

「ふたりの野口」に共通するのは、身体にやどる「自然」の発見であり、その主張は、現代にこそ必要とされる、「いのちの全体性」の回復である。

スピリチュアルデザイン—コンテキストデザインワークショップ総括

上林 壮一郎 (デザイナー、運営委員、担当講師)

霊学的世界というコンテキストを遠く近くに意識し、無意識世界と現象世界を結ぶ方法を探る本ワークショップの2009年度のテーマは、「言語」。デザインと言語はあまり関係ないように感じるが、深いところでは本質的な問題である。そんな予感が、実際のワークショップを経て確信へと変わった革新的で核心的な一年であった。

「境界が曖昧なロボット」—動的な関係性の中に出現するロボット 7月5日(日)

昨年度のスキマロボットに引き続き、慶應義塾大学の大澤博隆先生をゲストに迎えて、置かれるものによって空間にキャラクターが出現するというロボットの実験を行った。自由大学で最もエレクトロニックなワークショップである。

「書体ともの」—古書体漢字のセンス 8月9日(日)

中国の書家の仲崇霖先生をお迎えし、象形文字からより抽象的な漢字へ変化する途上にあった古代の書体、篆書の造形精神で実際の道具のスタイリングデザインをし、発泡スチロールで立体化し、古代における機能と形の結びつきのセンスを探った。ニクロム線カッターが大活躍した。

「言霊ともの」—モノ・コトの名前に潜む感覚価値 12月13日(日)

本学理事長の鎌田先生をゲストに招いて言霊と現象や道具との関係について探った。箸と端と橋が同じ語源であるように同音異義語というより同音同根語と言えるかもしれない。鎌田先生の言霊論の講義、マントラの歌、オノマトペの即興身体パフォーマンス。参加者である岡野さんにはオイリュトミーの舞い。鳥飼さんに新体道の舞い。私は同音異義語を探るワーク、同音同根語から発想した言霊造形を紙を使って表現するワーク。多角的で有意義なワークショップであった。参加者が最多であった。

「数ともの」—2の形・3の形の象徴と力 2月21日(日)

内と外、左右対称。二的構造のデザインである。それに対し、三脚、インターフェースとしてのマウス、120度の角度で構成されるハニカム構造、これらは三的構造のデザインである。第三の選択としてのオルタナティブにも「3」的な構造が内包している。ねらいは2の二元論的な構造のデザインに代わる3の三元論的な構造のデザインを探ることであった。ある参加者は、2つの部分からなる砂時計に対し、3つのふくらみのある砂時計をデザインした。「2」的な構造をもつ道具を「3」的な構造をもつ道具へリ・デザインすることに挑戦しながら、数とものの関係の困難な深みへと入り込んでいったようだ。初めてCGで作品を作った。



鎌田 東二先生

東京自由大学 2009年度講座報告

人類の知の遺産 (第IV期) 報告

井上 喜行 (担当・監査・運営委員)

4/11(土)	「日夏耿之介」 井村 君江 (妖精ミュージアム名誉館長)	直弟子である井村先生から、堀口大學とのこと、詩人、英文学者として、身近で見た日夏耿之介についてお話があった。出身地の飯田からお身内の方も見えて有意義な講座になった。	
5/9(土)	「マダム・ブラヴァツキー」 鏡 リュウジ (占星術研究家・翻訳家・平安女学院大学客員教授)	詳しく伝記から説き起こし、神智学協会創立、ユングとの関係や世界中を旅したこと、オルコット、スウェーデンボルグ、今東光、鈴木大拙とのことなど、質疑もおもしろかった。	
6/13(土)	「吉田兼俱」 鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授・京都造形芸術大学客員教授)	古事記の話から説き起こし、唯一神道の希求を歴史的文脈のなかで中世の改変に基づくとする。大元宮のスカンダル説明、スライドの上映もあり、大きな視点からの兼俱論であった。	
7/11(土)	「千利休」 熊倉 功夫 (国立民族学博物館名誉教授)	恩師林屋辰三郎から受け継いだ茶の湯の歴史を含めて、演劇性、政治性について一服のお茶をいただくようなお話であった。南方録の現代語訳を執筆中の生きた利休論であった。	
9/12(土)	「芭蕉」 吉増 剛造 (詩人)	奥の細道の地、松島、山寺、象潟、月山の映像(シネーこしらえの結界) による最高の芭蕉論でした。詩人シネ作家の吉増剛造ワールドの戸口へ皆が引き込まれ、限定版の資料も頂戴した。	
10/10(土)	「ヒルデガルト」 井村 宏次 (神秘学研究家)	実際は聖人であるのに聖をつけれない、影を持った中世の聖女について、キリスト教の虐殺史の後の修道院のビデオを見ながら、医学、音楽、絵画、詩、預言者の姿をお話いただいた。	
11/14(土)	「伊藤仁斎」 黒住 真 (東京大学教授)	年譜から説き起こし、朱子学から白骨観法等の修行、活物観について資料に基づいて詳しくお話があった。仁斎は徂徠、宣長へとつながる気先理後論であり、気一元論をとるという。	
12/12(土)	「植芝盛平」 坪井 香織 (メビウス気流法の会代表)	ご自身と合気道との出会いから、映像、ボディワークをまじえて、伝説上の人物の波乱万丈の植芝翁の姿と奥義を解説していただいた。気流法の演技もすばらしく感動をいただいた。	
1/9(土)	「カント」 花岡 永子 (奈良産業大学名誉教授)	難しいカントの理論をわかりやすく、資料にそって、人間の尊厳と美の追求という、神と人間の緊張関係を説いた、嬉しいお話で、広島からお出ましいいただいたことに感謝いたしました。	
2/13(土)	「最澄」 菅原 信海 (早稲田大学名誉教授)	最澄は、日本仏教を小乗的な奈良仏教から大乘に発展させた功労者という話から始まり、空海に比べやや影が薄いと見られがちな最澄像を一変させる、圧倒的知性のこもった講義でした。	

アートシーン21 PartVII「クリエイティブな世界を切り開く表現者たち」報告

長谷川 その (担当・運営委員)

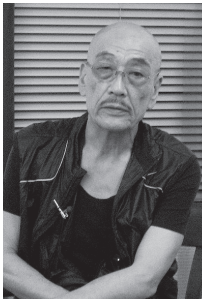
第1回 5/16 サークル・オブ・ライフ 「いのちの輪」 ~神話的知と7世代の未来をつなぐもの~ 北山 耕平氏 (アメリカ先住民研究・作家)

オルタナティブカルチャーの担い手となる雑誌「宝島」の編集長や「ポパイ」の創刊に携わった北山氏をお迎えした。氏は1979年、日食を見に訪れた先で導かれるようにネイティブアメリカンと出会う。そこであらゆるものが円であるという思想、サークル的のものごとを見るマインドに触れる。しかし始めも終わりもない円の時代から、直線の時代に置かれ時間を分断された彼らの厳しい実情を知ること。未来につながる神話知を蘇らせる考察などを話された。



第2回 7/18 「三輪山と天賦典式」 磨 赤兒氏 (俳優・舞踏家・「大駱駝艦」主宰)

幼年期から伊勢と三輪山の麓で過ごされた磨氏をお迎えした。海と山に抱かれ“神話の神”も地元では生きた隣人に等しかった、と。伊勢の海を見て脳細胞がパチパチと分裂したお話や、三輪山が錯綜した多くの思いの慰め魂を浄化する創作の原点の場だったとも。今、白塗りで舞台上立つ姿はご神体そのもの。悠久の歴史を持つ三輪山を背景に、先鋭的な感覚で“今という瞬間”を切り取り創作される磨氏の姿勢に共感の視線が注がれていた。



第3回 10/17 「詩とは何か、詩人とは誰か」 高橋 睦郎氏 (詩人)

詩は永遠の謎、詩を探し求め続けるのが詩人、と語る高橋氏。明瞭で透明感あるお声。幼年期、母にについて霊媒語りを聞き育ったのが詩人としての原点と話された。苦労は記憶の宝庫とも。現在に至る体験、三島由紀夫や草森紳一など多くの人物との出会い、エピソードを臨場感ある口調でユーモラスに語られ、その方の再来か?と錯覚するほど。人生の折々に紡ぎ出された詩を朗読して頂いた。「小夜曲」は生前の美しい山口小夜子さんを彷彿させていた。日本詩の精神史など話題は尽きず、滑るように時間は過ぎて行った。



第4回 12/19 「歌の力」 あがた 森魚氏 (歌手)

あがた氏の歌声は木霊のようにいつまでも響いた……。Xマスも近い12月にお迎えし、いつしかライブハウスと化する。第一部は抒情溢れる「赤色エレジー」、「サルビアの花」他、いくつか歌っていただく。タイトルに相应しく「歌の力」で聴く者の心を解かし、いつしか“あがたワールド”に。第二部は鎌田理事長とのトーク。音楽の影響を受け師匠と仰ぐボブディランの話、早川義男氏の話題をはさんで理事長との接点、デビューから今日までの経緯など熱く語られた。



第5回 2/20 「踊る身体は何を見るか？」

美しい佇まいに香木を思わせる山田講師。踊りは見ないと分からないと山田せつ子氏振り付け、出演作品「ふたりいて」と、カンパニー枇杷系の公演「愛情十八番」を放映。若い出演者の日常の身ぶりから、ダンスの振りが生まれていった経緯を。舞台では知覚を通し自分を見、他者も見ているとか。舞台でする

山田 せつ子氏 (ダンサー・コレオグラファー)

のはその日にしか生まれない踊りを作り出すために、歩き、座り、光・照明の確認、暗闇の客席を見つめる“空間測量”をする秘話など。後半は鳥飼運営委員とのトーク、質疑応答。内容は氏の美意識を始め多岐にわたり、最後は若者と身体。今後のダンスのあり方など深く語っていただいた。

